

本殿

出雲大社の本殿は、出雲大社の主祭神である大国主神を祀っています。本殿は大社造の代表的な建築物のひとつで、古代の宮殿を模して造られています。現在の本殿は 1744 年に造替されたもので、高さは 24 ㍓あり、日本で最も高い社殿となっています。1952 年に国宝に指定されました。

本殿には、9 本の支柱が 3×3 の格子状に配置されています。最も太く、建物の構造上、最も重要な柱は「心御柱^{しんのみはしら}」と呼ばれる中央の柱です。切妻の端の中央（中央の柱の真北と真南）を支える 2 本の柱もほぼ同じ太さで、屋根まで伸びています。檜の皮を厚く重ねた屋根は、2013 年に行われた本殿の改修工事で葺き替えられました。屋根の棟には、長さ 7 ㍓を超える 2 本の千木と、銅板に巻かれたた 3 本の円筒形の堅魚木^{かつおぎ}が取り付けられています。

本殿は南側から入ります。建物内部は前側の「下段」と奥側の「上段」に分かれており、奥の上段の床がやや高くなっています。大国主神が祀られている内側の聖室は、「上段」の右側の区画にあり、西に面しています。神職は大国主神に供物を供える際、本殿の南東側にある階段を上ります。本殿の中に入ると、中央の柱から東側の壁の中央にかけて仕切りがあり、神の聖室に直接近づくことはできません。これにより、内側の聖室が外からは遮られ、神職がそこにたどり着くには、神職は左に曲がり「下段」から「上段」へと時計回りに歩く必要があります。

本殿には、大国主神のほかにも複数の神々が祀られており、内側の聖室の北西部には「別天津神^{ことあまつ}」と呼ばれる 5 人の神々が祀られています。日本最古の文献である古事記によると、別天津神は天地創造の際に最初に現れた 5 人の神であるとされています。また、中央の柱の近くには、大国主神の息子である和加布都奴志命^{わかふつぬしのみこと}が祀られています。和加布都主命は大国主神と協力して土地の農業開発を推進したと言われています。

本殿の天井には出雲を象徴する、渦巻く色とりどりの雲の絵が描かれています。これは、「八雲の絵」と言います。

本殿は、出雲大社の創建以来、何度も造営されてきました。その歴史の中で、本殿の姿は大きく異なって見えていたかもしれません。古代の本殿はさらに壮大で、48 ㍓もの高さだったと言われています。13 世紀と 17 世紀に描かれた絵図が残っており、本殿の柱が赤く塗られてはいます。江戸時代（1603-1867）には、本殿は無塗装の木で造営されました。